

自由研究

『複雑で難解な応仁の乱を読み解く』



2018年12月9日

発表者

末次 弘幸

趣旨

日本史の教科書に必ず出ていて、その名前は誰でも知っている「応仁の乱」。だが、登場人物が多いうえに、人間関係が複雑で、どのように始まり、なぜ11年間も続き、どのように終わったのか。

複雑で、難解と言われるこの戦乱を、できるだけ分かりやすく、読み解いてみたい。

概要

第1部 時代背景概観

1. 室町時代概観
2. 室町幕府

第2部 応仁の乱について

3. 応仁の乱概要
4. 主な登場人物
5. 主な原因
6. 応仁の乱勃発～上御霊社の戦い～
7. 東西両軍の激闘～一条大宮の戦い～
8. 最大の激戦～相国寺の戦い～
9. 地方への波及～摂津での戦い～
10. 東西両軍大将の死と和睦への動き
11. 応仁の乱終結
12. 長期化の要因

第3部 応仁の乱ゆかりの地(京都)

教科書に出ていたのはどちら？

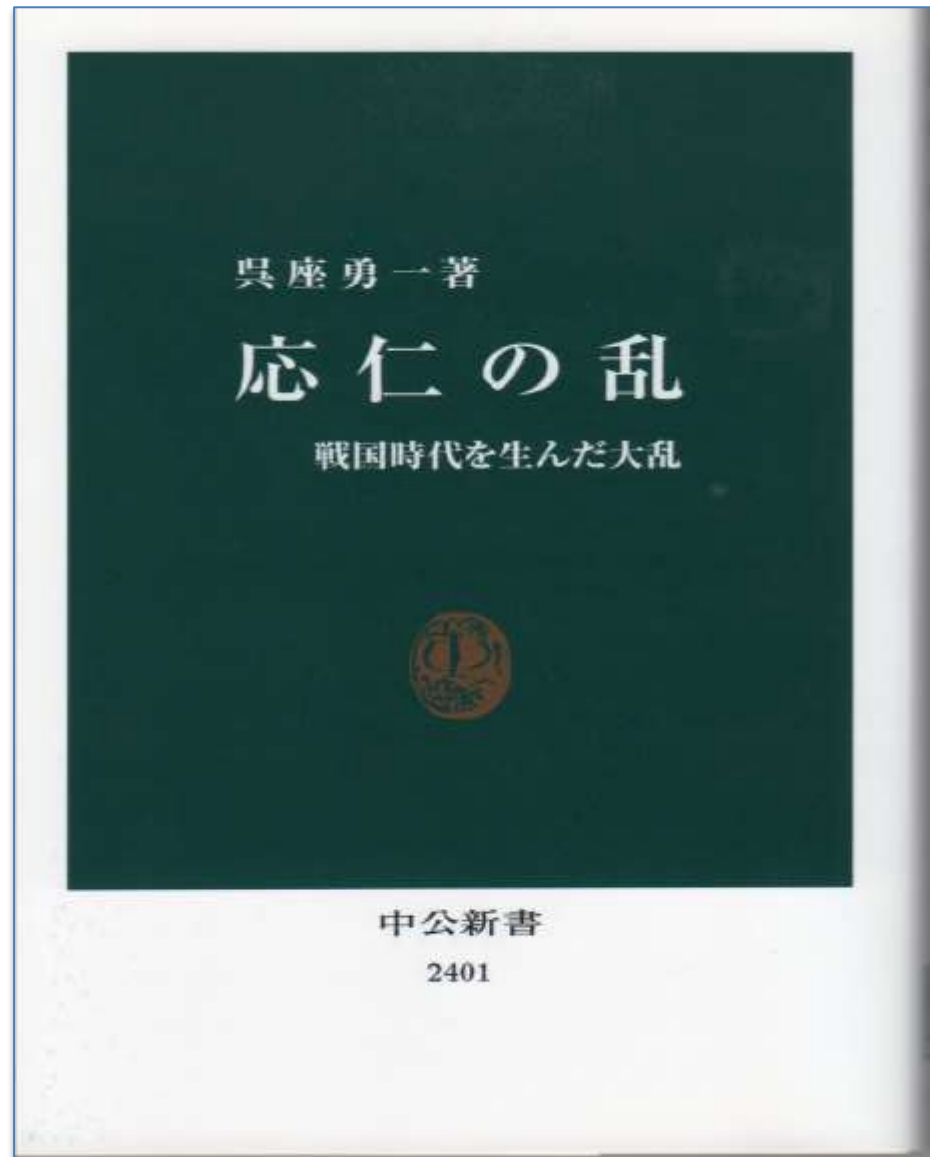
A. 応仁の乱

B. 応仁・文明の乱

応仁・文明の乱とは？

- 1467年－1477年：11年続いた戦いだが、元号「応仁」は2年間のみ。
- 1467年3月5日：文正から**応仁**に改元
- 1469年4月28日：応仁から**文明**に改元
 - * 戦いの期間は「文明」と呼ばれる時代のほうが長い
- 正確を期したい歴史学者が、「応仁・文明の乱」と呼びたがるのだろうか。
- どのように呼ぼうが、内容は変わらない。

本のタイトル



第1部 時代背景概観(1. 室町時代)

a. 室町時代総括

- 期間: 西暦1336年から1573年まで(237年間)
15人の将軍(初代尊氏~15代義昭まで)
- 1333年に後醍醐天皇の命により、足利尊氏や新田義貞が鎌倉幕府を滅ぼす。
- 1336年に京都を制圧した足利尊氏は、新たに光明天皇を擁立し、政治方針である建武式目を制定。
- 1338年に尊氏征夷大将軍となり、室町幕府を開く。
- 1573年に15代将軍の足利義昭が織田信長によって京都を追放され、室町幕府滅亡。
- * 室町時代の始まりを1338年とする説もある。

室町時代－農業生産力の向上

a.生産力向上の背景

- 土地の集約化・多角化が進んだ→生産性を向上
- 稲の品種改良→収穫時期の異なる早稲、中稲、晩稲が普及→稲の収穫増大
- 農耕の発達：鉄製農具や牛馬を利用した農耕は、鎌倉期よりもさらに普及
- 肥料：刈敷・草木灰に加え下肥や厩肥（きゅうひ）の使用
→農作物の収穫の安定

b.結果：

- 二毛作が全国で一般化。
 - 畿内などでは、米・麦・そばの三毛作が行われる。
- * 『老松堂日本行録』（1420年に来日した朝鮮使の記録）：
「摂津国尼崎で三毛作が行われていた」。

2. 室町幕府～応仁の乱の遠因を探る

a. 不安定な存立基盤－連合政権

源氏の中心的家系という血筋の良さから尊氏をリーダーとして担いだのは、足利一門の細川、畠山、斯波など、言ってみれば昔の仲間。

そういう人たちに対して強力なリーダーシップを発揮している立場にはなかった。

b. 脆弱な軍事基盤

足利将軍家に強大な軍事力がある訳ではなかった。

2. 室町幕府～応仁の乱の遠因を探る

C. 脆弱な財政基盤

- 味方になった大名たちに多くの恩賞を与えたため、**直轄領(御料所)は少なく、財政基盤は脆弱。**
- 守護大名の権限が強まる。幕府弱体化。

政治は将軍と有力な守護大名たちとの合議によっておこなわれるようになる。

- 守護大名の力が強く、中央政権の力が弱かったことが、室町時代の最大の特徴であり、幕府が安定せず多くの戦乱を招く原因になったといえる。

初代征夷大將軍 足利尊氏



家督争い続出の背景

• 分割相続から単独相続へ

鎌倉時代後期に御家人たちが子孫を分家として、領地を分割相続→弱体化。

室町時代では、惣領(家督継承者)が領地をまとめて引き継ぐ単独相続に変更。

惣領になるか分家になるかで人生が大きく変わってしまうため、家督争いが絶えず、こじれた場合は将軍が家督を決めることとなった。

強権もない将軍が各家の家督争いに巻き込まれていくことになった。

室町幕府の全盛

第3代将軍義満の時代

- 室町幕府の弱点(政権の存立基盤・財政基盤・軍事基盤)強化を図り、幕府の政治体制を確立し、安定させた。
- 1392年、南北朝の合一
- 地方の有力国人を組織して奉公衆(将軍の親衛隊: 5,000人)を編成←軍事基盤強化
- 強大になりすぎた有力守護の勢力を討伐し、将軍権力の強化に努める。←存立基盤強化
 - 1391年 明德の乱(11か国の守護である山名氏清)
 - 1399年 応永の乱(6か国の守護である大内義弘)
- 1404年 日明勘合貿易はじまる←財政基盤強化

第3代將軍足利義滿



第4代将軍以降～不安定に戻る

• 第4代将軍足利義持の時代

父・義満の時代を否定し、父の独裁政権から、管領の補佐を受けて政治を行う武家による連合政権に戻した。

1411年には、義満が苦勞して始めた勘合貿易を取りやめ、明との関係を絶った。

▪ 第6代将軍足利義教時代

1432年に勘合貿易を再開。

内政面では義満の強権的手法を踏襲。主だった守護たちを処分するなど恐怖政治を行う。

義教による処分を恐れた播磨守護・赤松満祐に1441年に殺害される(嘉吉の乱)。→将軍の権威失墜・幕府の弱体化につながった。

勘合貿易中止・再開の背景

- 義満が苦勞して始めた勘合貿易を取りやめ、明との関係を絶ったのは？
 - * 貿易の形式：①倭寇と区別するために勘合を使用する②義満が明の皇帝に朝貢する
- 第4代将軍足利義持は、義満が亡くなると、**朝貢形式が屈辱的であるという理由で貿易を中止。**
しかし、
- 6代将軍足利義教は利益の大きさに注目して貿易を再開

室町幕府職制図

京都

幕府

管領 (幕政総括)

三管領

細川氏
斯波氏
畠山氏

四職

赤松氏
山名氏
京極氏
一色氏

評定衆 — 引付方 (所領の訴訟を審理)

政所 (幕府の政務・財政)

二階堂氏

伊勢氏

問注所 (文書記録の保管・審理)

町野氏

太田氏

侍所 (京都での軍事・警護、刑事裁判)

将軍

鎌倉府

(関東8カ国と伊豆、甲斐)

関東公方

関東管領

(上杉氏)

評定衆 — 引付方

政所

問注所

侍所

守護 (10カ国)

地方

奥州探題

(奥羽の軍事・行政を統括)

羽州探題

(奥州探題より分離し、出羽の軍事・行政を統括)

九州探題

(九州8カ国の軍事および行政・貿易の一部を統括)

守護 (守護職21、45カ国)

地頭

地方

室町幕府の組織

- 足利義満の時代に整備された。
- 幕府内にも争いの火種が.....
 - 畠山家一家督争い
 - 斯波家一家督争い
 - 細川勝元vs山名宗全－幕政での主導権争い
 - 山名vs赤松－領地争いで対立
 - 京都の幕府vs鎌倉府

第2部 応仁の乱について

【応仁の乱概観ーニュースヘッドラインの要領でー】

a. 時期：1467年1月、畠山政長を畠山義就が攻め勝利。

* 応仁の乱はこの上御霊社の戦いをきっかけに始まる。

1477年11月まで約11年間続く。

b. 場所：京都の市街地（主戦場）から地方へ波及。

c. 軍勢：東軍・細川勝元、西軍・山名宗全率いる

総計約27万人もの兵士たち。

東西に分かれて戦鬪を繰り広げた。

d. 発生の原因：8代将軍足利義政の継嗣問題を軸に、細川勝元・山名宗全による権力闘争、管領・畠山家、斯波家の家督争いなどが複雑に絡みあった。

3. 応仁の乱概観

- e. 長期化要因：将軍義政の指導力不足・優柔不断、戦争のメリットを享受したい人たち（東軍・赤松政則、西軍・畠山義就、大内政弘）の存在、足輕の暴走。
- f. 終結：主戦論者の畠山義就が河内へ撤兵、大内政弘が領国へ帰り、応仁の乱が終わる。
- g. 影響・結果：室町幕府の権威失墜。全国各地で有力者が割拠する戦国時代の始まり。
- 現在の日本文化につながる東山文化が花開く。
 - * 水墨画、書院造、能、茶の湯、立花など

応仁の乱略年表

- 1467年1月 上御霊社の戦い
5月 一条大宮の戦い
8月 大内政弘(西軍)が大軍を率いて上洛
10月 相国寺の戦い
1468年11月 足利義視、西軍に寝返る * 東西幕府
1472年1月 山名宗全と細川勝元、和平交渉。不調
1473年3月 山名宗全死去(70歳)
5月 細川勝元死去(44歳)
12月 足利義尚が征夷大將軍に就任
1474年4月 山名政豊と細川政元の間にも両家和睦
1477年9月 畠山義就、河内に下って河内を制圧
11月 大内政弘、4か国守護を安堵され、帰国
* 1467年3月5日 - 1469年4月27日: 応仁

4. 応仁の乱関係人物

• 足利将軍家

- 足利義政(1436－1490)：8代将軍。応仁の乱の原因をつくった一人。優柔不断な態度は長期化の要因となった。
- 日野富子(1440－1496)：藤原北家に連なる日野家の出身。義政の妻であり義尚の母。
財力を生かして、応仁の乱終結に尽力。
- 足利義尚(1465－1489)：義政と日野富子の嫡男。応仁の乱の最中の1473年に第9代将軍に就任。1487年9月に六角氏討伐に出陣。酒色に溺れて、1489年陣中にて病死。
- 足利義視(1439－1491)：義政の弟で一時は将軍の後継者に指名される。義尚誕生で微妙な立場に。応仁の乱発生時は東軍の細川氏側であったが、山名氏からの誘いに乗って、西軍に寝返り、西幕府の将軍となる。

第8代将軍 足利義政



日野富子



日野富子の木像（宝鏡寺蔵）



日野富子: 1994年NHK大河ドラマ「花の乱」

応仁の乱関係人物(2)

- **細川勝元(1430－1473)：東軍大将**。第11代細川京兆家当主で、摂津・丹波・土佐・讃岐・伊予守護。13歳で家督を継ぎ、16歳で管領に就任、通算23年間管領を務めた。山名宗全の養女を正室に迎え、宗全とは一時は協力関係にあったが、**幕府内の主導権争いから対立**するようになる。背後から人を操って世を動かした謀略家のイメージが強いが、和歌・絵画・禅・医学などにも通じた教養人。
- **山名宗全(1404－1473)：西軍大将**。持豊(出家して宗全を名乗る)。山名家は南朝方の大将格だった新田義貞の同族。但馬・備後・安芸・伊賀・播磨守護。侍所頭人を務めた。

細川勝元像一龍安寺蔵



山名宗全 (『東山桜莊子』より)



応仁の乱関係人物(3)

- **畠山義就(1437-1491)**: **畠山持国と遊女**の間に生まれた子で、持国が後継者に指名したが、義就の出自が家督争いの一因になる。細川勝元の介入で家督の座を追われるも、山名宗全の支持を得て、西軍に加わる。義就の優れた軍事能力と河内・大和の土豪に慕われている点を評価したのであろう。1466年(文正元)12月上洛。
- **畠山政長(1442-1493)**: **畠山持国の弟・持富の子**。細川勝元の支持を得て家督を継承し、管領にも就任するが、1467年にこれを罷免されるところから応仁の乱がはじまる。応仁の乱終結後も、義就との死闘が続いた。



スペシャル

応仁の乱
山名宗全のクーデター



長政 山名 富



元勝 川細



全宗 名山 山



就義 山名 富

午後

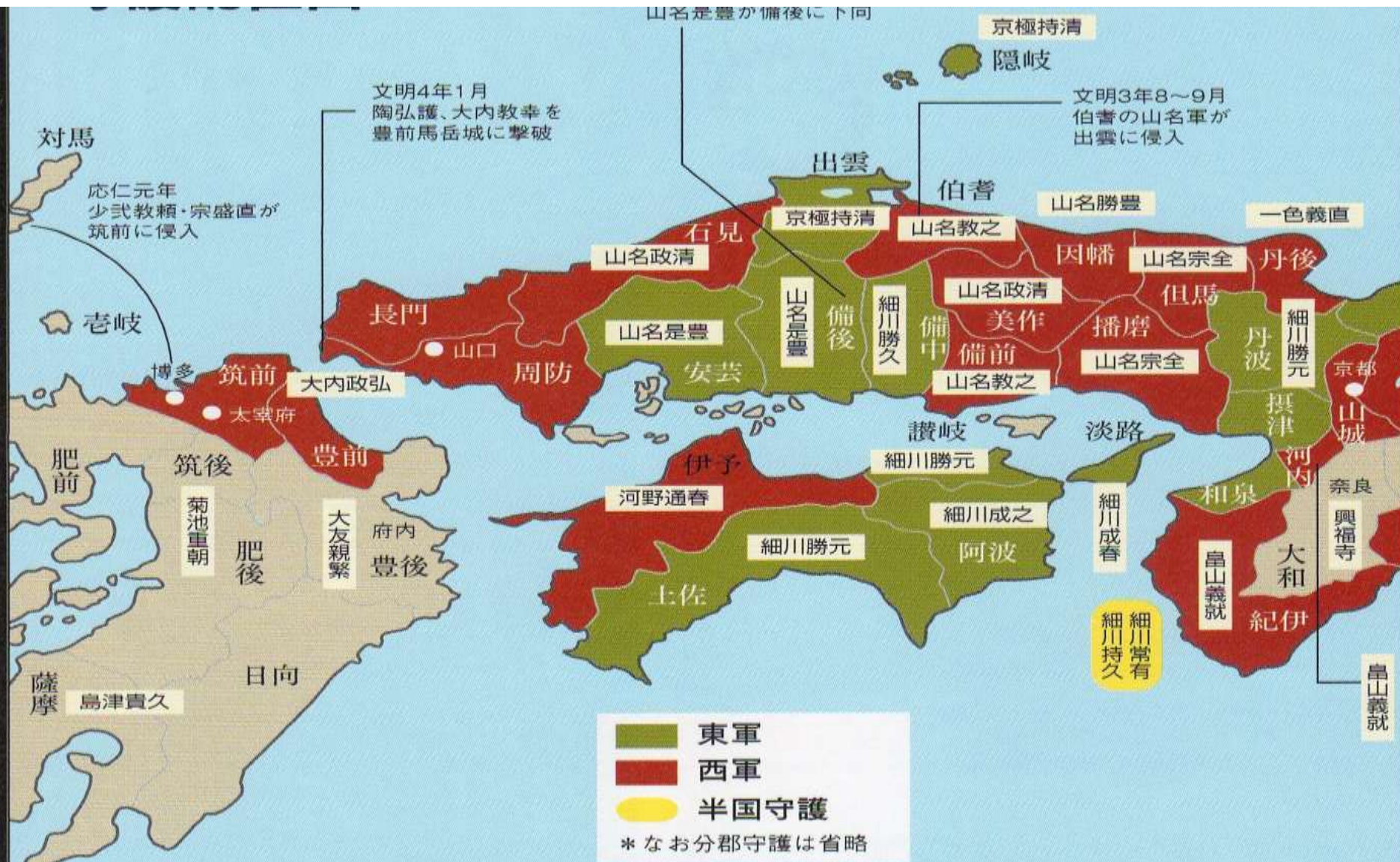
応仁の乱関係人物(4)

- **大内政弘(1446-1495)**:守護大名大内教弘の子で、母は山名宗全の養女。長門・周防・筑前・豊前を領有し、瀬戸内の水運権をめぐって、畿内を領有する細川勝元と対立した。応仁の乱では山名宗全の求めに応じ、大軍を率いて瀬戸内海を東上し、摂津の兵庫に上陸。そこからは陸路で摂津各所において戦鬪を繰り返して上洛。山名宗全の死後は西軍の中樞を担った。→摂津の敵。摂津守護細川勝元の領地に、土足で入り、荒らし回った男。
- **朝倉孝景(1428-1481)**:斯波義廉の守護代で、西軍主力級の活躍を見せていたが、細川勝元から守護権限行使の密約をもらうと、1471年(文明3)2月に東軍に寝返る。京都の戦いはどうでもよく、越前平定に乗り出し、斯波家も追い出して、守護として越前を支配することとなった。下克上の元祖。

応仁の乱関係人物と対立の構図

- 足利義政・義尚－足利義視：将軍継嗣
- 細川勝元－山名宗全：幕政での主導権争い
- 畠山政長－畠山義就：家督争い
- 斯波義敏－斯波義廉：家督争い
- 赤松政則－山名宗全：領地争い
 - * 赤松氏：旧領(播磨・備前・美作)奪還を目指す
- 細川勝元－：瀬戸内海の水運権で対立。
- 細川勝元－畠山義就：勝元への怨恨(守護の座を追われた過去がある)
 - * 反細川派：畠山義就・大内政弘
 - * 反山名派：赤松政則

応仁の乱当時の勢力図



5. 応仁の乱主な原因(1)畠山家の家督争い

a. 畠山家の家督争い

- **畠山持国の心変わり**: 弟の持富に家督を譲る約束を反故にして、実子・義就を後継者としたことで、畠山家分裂。
- **将軍義政の介入と揺れる裁定**: 畠山家の家督争いに介入。
①義就に家督相続を認める②細川勝元の進言もあって義就の従弟である政長を家督とした。
結果→義就と政長の対立の溝を深める。
- 3度目の介入: 1467年1月には管領となっていた政長を、山名宗全の進言により突然罷免し、義就を家督とする。
結果→将軍義政の二転三転する決定が、政長・義就の激突につながる→応仁の乱勃発へ。
- また三管領家の一つ斯波家内の家督争いについても、家督の斯波義敏を罷免して、義廉を家督にするなど、将軍義政の朝令暮改で家督争いに発展した。

主な原因(2) 細川勝元と山名宗全の権力闘争

b. 細川勝元と山名宗全の権力闘争

- 細川勝元が山名宗全の養女を正室に迎えるなどの縁戚関係により、親密な関係。
- **将軍継嗣問題**: 足利義視を将軍に推す宗全と足利義政から義視、義尚へと政権移譲を望む勝元との政権構想の違いから対立するようになる。
- **赤松家の復興支援**: 支援する勝元に対し、赤松と領地をめぐる争う宗全は反対し、両者の対立深まる。
- **管領家の家督相続**: 勝元→畠山政長、斯波義敏を支援
宗全→畠山義就、斯波義廉の支援
- 1467年1月の上御霊社の戦いへの対応: 勝元: 将軍義政の指示「畠山家の私闘であるから軍事介入しないように」
勝元: 律儀に命令を守る。宗全: 無視して援軍を送った。
- 政長を見捨てたとして世間の批判にさらされた勝元は、宗全への反撃を決意し、これが大乱への引き金となった。

主な原因(3) 将軍継嗣問題

- c. **将軍継嗣問題** (第8代の足利義政の後継争い)
- 義政は29歳になっても妻の日野富子や側室に男子(世継ぎ)ができないことから、
 - 1464年12月弟の義視を仏門から還俗させて自分の後継者にした。義視の後见人: 細川勝元。
 - ところがその1年後(1465年12月)に義政と富子の間に義尚が生まれる。
 - 富子は義尚を後継将軍にするために山名宗全に援助を求め、将軍継嗣問題も細川勝元と山名宗全対立の要因となった。